

生存科学研究ニュース

Vol. 41, No.2 2026 年 7 月発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp https://seizon.umin.jp

人新世の生存科学
—地球と人間の健康問題—
理事 小泉英明



クロスオーバーの現実

科学技術の急速な進展は人類に多大な恩恵をもたらしたが、今やイノベーションの蓄積は地球環境に直接的な影響を与えている。2020 年に地球上の人工物の総重量が全生物の総重量を超えるという歴

史的転換点を迎えた(Crossover point : Ron Milo 研究室発表、Nature 2020)。学術的信頼度が高いこの論文は、統計誤差を 2020 ± 6 年と明示している。

人新世と普遍倫理

この明瞭なエビデンスに基づく「人新世」(Anthropocene)の到来は、従来の医学や生命倫理の前提を根本から揺るがしている。従来の倫理学は、人間社会の習俗や慣習など、「人間中心の論理構造」に根差していた。しかし、工学や科学技術によって生産された人工物が地球規模に至った現在、我々には従来の人間中心主義的なパラダイムを180度転換させた新たな倫理が必要である。そこで人間が自然を管理・消費するだけでなく、「人間は自然に生かされている存在」とであるという原点に立ち返り、人新世に適用可能なより普遍的な新たな倫理が必要である。この点に関しては、より普遍的な倫理の構築と社会実装(教育)を目指すプロジェクトが進行中である(公益社団法人日本工学アカデミー政策提言プロジェクト:「人類の安寧とより良き生存」(Human Security and Well-being)を目指した工学倫理と工学教育)。

水の惑星上の生命進化

地球は 46 億年前に誕生したが、灼熱の地球が冷えるにつれて大量の水蒸気が凝結して、40 億年前に海が形成されたとされる。強酸性の海もやがて炭酸カルシウムや酸化鉄が沈殿。透明となった海にシアノバクテリアが現れて、光合成によって地球上の大気に酸素をもたらした。その海で育まれた生命が、進化によって現生人類へと繋がっている。動物の情報処理系は水中イオンで信号伝達する神経系が主役であるが、この原型はエディアカラ紀(6.4~5.4 億年前)に進化した。動物は海で生まれ育ったので、神経系の情報伝達は水中イオンによる。これが動物の情報処理系進化の初期条件となっている。

一方、AI を含む ICT では、金属中電子によって光速の波動で情報伝達するので、神経系より約100万倍速い。伝達速度が超遅い神経系は、分業して高速処理する神経回路が必然的に進化した。この並列分散処理から逐次処理に入って明瞭な意識が浮かび上がってくる。水が基本となる情報処理の必然的進化機序の全体を「オンディーズ仮説」と呼んだ(H. Koizumi, CIM Conference, Las Vegas, 2025)。

地球と人間が調和した共生圏を求めて

このように生命の本質が地球の「水」に根差している以上、目の前の患者の健康(Human Health)を守るためには、その生命を育む地球の健康(Planetary Health)を守ることが前提となる。人新世における真の医療イノベーションとは何か、地球と人間が調和する新たな倫理的羅針盤が必要となる。「人類の医学」と「地球の医学」はその本質を同じくする相同概念(Isomorphic Concepts)であり、志向すべき普遍倫理は「生存科学」の基盤の一つを成すものであろう。

(公益社団法人日本工学アカデミー顧問)

「大学生および大学院生の飲酒行動と孤独感に
関する研究」 研究会実施報告
研究責任者 朴峠周子

本研究では、20代を対象に、COVID-19 流行期における大学・大学院在籍経験の違いと、その後の飲酒行動や孤独感との関連を検討することを目的としている。あわせて、社会的孤立、孤独感、飲酒動機および飲酒行動の関係性を心理社会的観点から整理し、若年成人における飲酒行動およびメンタルヘルスに関する知見の蓄積を図るとともに、健康支援や学生支援のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目指している。

研究方法として、20代を対象とした Web 調査を実施する予定である。対象者は、COVID-19 流行期における大学・大学院在籍経験の有無や在籍期間に基づいて分類する。調査では、社会的孤立、孤独感、飲酒動機および飲酒行動に加え、COVID-19 流行期の学生生活や対人交流の状況について回顧的に把握する。これらのデータを用いて、COVID-19 流行期の学生経験と現在の孤独感および飲酒行動との関連について分析を行う予定である。

研究計画の具体化と研究実施体制の整備を目的として、オンライン形式による研究会を開催した。第1回研究会（2026年4月30日）では、研究背景および研究目的を共有したうえで、COVID-19 流行期における社会的接触の制限や生活環境の変化が若年者の対人関係や飲酒行動に及ぼした影響について検討した。その結果、COVID-19 流行期の学生経験を本研究の重要な背景要因として位置付けることを確認するとともに、調査対象者の範囲および研究の焦点について整理を行った。

若年層における孤独感

大学生・大学院生は孤独感を経験しやすい集団

・生活環境の変化や人間関係の再構築に伴う移行期

- ・英国大学生の79%が中程度以上の孤独感を抱く (Akram et al., 2025)
- ・10代から20代にかけて孤独感の高頻度群が増加傾向、中年期と同程度の水準に達する (内閣府, 2026)

・コロナ禍は学生の孤独感を増大させた環境要因

- ・日本の一大学の学生の約40%が孤独感を抱く (澤村・横山, 2022)
- ・大学生の孤独感は居住環境との関連がみられない (伊藤・栗本, 2022)
- ・コロナ禍で加速したデジタル活用 (情報通信白書, 2021)
- ・過度なオンラインコミュニケーション使用は孤独感増大のリスク要因 (Hill et al., 2025)

オンライン研究会の様子

第2回研究会（2026年5月28日）では、研究目的および研究仮説の整理を進めるとともに、社会的孤立、孤独感、飲酒動機および飲酒行動の関連構造について検討した。また、COVID-19 流行期の学生経験者とそれ以外の者との比較可能性や各要因の把握方法を整理し

た。さらに、Web 調査の実施方法、調査票設計上の課題、インターネット調査会社の活用可能性について検討し、研究実施に向けた実務的課題を明確化した。

本研究は、「大学生および大学院生の飲酒行動と孤独感に関する研究」を課題として開始し、これまでの研究会を通じて、COVID-19 流行期の学生経験を重要な背景要因として位置付けた研究枠組みの整理を進めてきた。また、社会的孤立、孤独感、飲酒動機および飲酒行動の関連を検討するための分析視点を具体化するとともに、研究実施に向けた課題および必要な準備事項を整理した。

今後は、測定指標および調査項目の選定を進めるとともに、COVID-19 流行期の学生経験の把握方法や分析枠組みの精緻化を図る。また、インターネット調査会社の選定や調査実施手続きの具体化を進め、研究実施に向けた準備を進める予定である。

「豊かな孤独(Solitude)の時間が持つ自己治癒力について—ものづくり、ダンスオブスリー、箱庭制作」の研究会

研究責任者 町澤理子

1. 研究の背景

本研究は、2023年から3年間にわたり実施された「過疎地と都市部における高齢者の心理・比較研究」の成果を踏まえ、それをさらに発展させる試みとして提案された。

前研究では、異なる専門分野の者が集うことで、多角的な視点による新鮮な発見があった。具体的には、工学(都市デザイン)の視点から、街づくりではコミュニケーションを活性化する「場のデザイン」として、自由に出入りし会話ができる「中庭のような境界空間」で人々が出会い続けることの重要性が示された。このような境界空間のあり方は、心理学における「自我境界」、精神分析家 D.W.ウィニコットによる「潜在空間(potential space)」や「移行空間(transitional space)」の概念と深く共通し、心理療法や芸術療法の治療的意義とも密接に関連することが共有された。街を活性化する工夫は、孤立や分断を避け、内外の関係性を維持するという意味において、個人の生命力を活性化する工夫にも共通している。

これらの知見をふまえて、都市部・農村部のデイサービスにおける地域特性を体感した実地調査や、都市部下町の心療内科外来における高齢者臨床を行う中で、時代や地域社会の変遷に伴う高齢者の生活

課題の現状がより明確になった。前研究の成果は中間および最終報告としてまとめられた(生存科学 36-1:121-146.2025 他)。

2. 孤独の二つの意味：「Loneliness(寂しさ)」と「Solitude(主体的で豊かな孤独)」

孤独は現代における重大な社会問題であり、高齢者のみならず子供や若者、壮年期にみられる「孤独感(Loneliness)」は深刻さを増している。前研究の過程で、筆者は独居高齢者の増加や孤独死の日常化に着目した。しかし患者の生(なま)の声から、「自由に気兼ねのない生活」を求め、子どもからの同居の誘いを断り独居を選択する高齢者(特に女性)が予想外に多いという現実と直面した。そして、人間の本来の姿である「孤独」を、社会的孤立と混同したり、「Loneliness 寂しさ」という否定的感情の側面だけからとらえずに、もう一つの「Solitude 主体的で豊かな孤独」という肯定的側面を明確にする必要があると考えた。

一見逆説的であるが、自分から求めるひとりの時間である Solitude は、内面と向きあい自己との対話や内省、創造的活動をする時間であり、自己治癒力を高め、自己同一性の更新や心の成長につながると考えられる。子供にも大人にも創造的であるために必要な体験であるが、現代社会は過剰な情報に溢れ、人々は常に外部からの刺激に反応し続けることを強いられている。社会学者の E.ボールディングは、こうした環境下で「人間は刺激に溺れ、内面生活やそこから生じる想像力・創造性の成長を阻止し、萎縮させることになる」と 1960 年代に警告している。

本研究では、対象者に創造的な個の時間としての「Solitude 主体的で豊かな孤独」を安全な枠の中で体験していただくが、この安全感の存在が極めて重要である。そして、年齢や立場を問わず Solitude の体験によって自身の「内的資源」に触れることが「創造性の萎縮」を防ぎ、自己治癒力や変化への適応力を高める可能性を調査することを目的としている。

具体的には以下の 3 つのアプローチを行う。栗本美百合氏(臨床心理士、アートセラピスト)は、「ものづくり」活動を、内的世界との対話が外界への自己表現につながる重要なプロセスと位置づける。静かに自分と向き合う時間を日常に持つことが創造力を育みレジリエンスを向上させると考え、高校・大学の授業やワークショップでの「ものづくり」という芸術療法の体験が、ストレス緩和や孤立感の軽減に与える効果を検証する。榊蔵美智子氏(臨床心理士、ユング派分析家)は、前研究で3年間にわたり

調査を継続してきた鳥取県智頭町の「森のミニデイ」でのフィールドワークをもとに、日常生活における「ひとりで過ごす時間」や「ものを作る時間」が持つ意味をインタビュー調査で明らかにし、対象者の箱庭制作も試みる。町澤理子(心療内科医師、ユング派分析家)は、精神療法を行う医師や心理士、支援にあたる保健師を対象とし、安全な保護された空間での本来の自発性表現としてのボディーワーク、「Dance of Three」を実践し、治療者・支援者自身の臨床・支援能力の向上や心の健康度(ウェルビーイング)増進への効果を調査する。

第1回研究会は2026年4月12日、第2回は6月1日に開催した。今後は月1回 Zoom による研究会を実施し、各アプローチの進捗を共有しつつ研究を進める予定である。



智頭町でのうちわ作りの様子

事務局 だより

当財団会員(助成研究)の本田美和子先生(日本ユマニチュード協会代表理事)が協力・監修を務めた映画『急に具合が悪くなる』が、第79回カンヌ国際映画祭で最優秀女優賞を受賞しました。

主人公のひとりであるマリーがユマニチュードの導入に取り組む介護施設の施設長という設定のため、ユマニチュード考案者のイヴ・ジネスト氏らとともに、濱口竜介監督の構想段階から参画されていたとのことです。

本田先生、関係者の皆さまに心よりお祝い申し上げますとともに、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

映画『急に具合が悪くなる』は、2026年6月19日(金)より日本全国で公開中です。

『レジリエンス—変化をおこす力を編む—

地域の再生と生存』

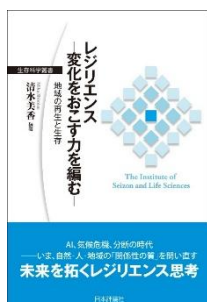
清水 美香 編著

本書出版から2か月を経て(6月末現在)、少しずつ読者の方々から呼応を頂く。例えば、その内のお一人で、大学教員Nさんは、持続可能な社会に関わる授業の学部生や院生に向けて、「(本書は)視点の転換を迫る事例と枠組みがあり、制度や暮らしに関する日々の選択をどうしていくか、具体的に考えるきっかけになれば」「多くの視点・論点が記載されており、そのどれが学生の視界を開き、彼らの研究活動を推進するのに役立つことも素晴らしいのですが、それぞれの人生において響くときに響き、地域の再生と生存の起点・源としての地域レジリエンスという視点・見方が、研究活動を超えて、浸透する時が来るとよいな」として、同本を授業に活用くださっているようだ。

こうした呼応自体が、執筆者や、その仲間達との間に、相乗作用を呼び起こし、それぞれの現場でのアプローチや実践へと波打っていく。このプロセスは、本書の軸になっている「多様な横糸がそれぞれの色を帯びながら、本書に通底するレジリエンスという縦糸と交差し、相互作用によって少しずつ調整され、紡がれ、一つの帯のように織られていく」にも重なる。そのことは、本書が焦点を当てる『個別の学問分野に加え、地域の現場や日常の暮らしから得られる伝統知、地域知、実践知、生活知、身体知、経験知など——時には目に見えず、言語化しにくい知をも含めて、それらの知が重なり合う「境界領域」(清水 2023)を重視し、そこから引き出される気づきや知恵を糸口に、「自然—人—社会」の連続性に向けた協働による知(協働知)を共に創りあげていく方向に向かうこと』とも響き合う。

本の完成と同時に帯の言葉をどうするか編集者に聞かれ、今の時代を俯瞰して「AI、気候危機、分断の時代、いま、自然・人・地域の関係性の質を問い直す」として頂いた。日々のニュースに接するたびに、この想いは日増しに強くなるばかりだ。

2026年4月30日発行 ISBN 978-4-535-98550-6
本体価格 2,800円+税



- 4月28日(火) 40年史編纂委員会開催
- 4月30日(木) 大学生および大学院生の飲酒行動と孤独感に関する研究
- 5月7日(木) 社会的に不利な状況にある人との共生に向けた社会の構築に向けた研究会開催
- 5月12日(火) IoT 歯ブラシによる地域高齢者の口腔セルフケア行動分析と行動変容支援研究会開催
- 5月17日(日) 沖縄県民の健康の維持・増進を見据えた保幼こ小の探究的カリキュラム研究会開催
- 5月19日(火) 40年史編纂委員会開催
- 5月24日(日) 沖縄県民の健康の維持・増進を見据えた保幼こ小の探究的カリキュラム研究会開催
- 6月2日(火) 理事会開催
- 6月4日(木) 社会的に不利な状況にある人との共生に向けた社会の構築に向けた研究会開催
- 6月7日(日) 沖縄県民の健康の維持・増進を見据えた保幼こ小の探究的カリキュラム研究会開催
- 6月9日(火) 40年史編纂委員会開催
- 6月13日(土) 保育パワーアップ&みらいエンパワメント研修
- 6月23日(火) IoT 歯ブラシによる地域高齢者の口腔セルフケア行動分析と行動変容支援研究会開催
- 6月23日(火) 評議員会開催
- 6月30日(火) 40年史編纂委員会開催

夏季休業のお知らせ

当財団では、誠に勝手ながら下記日程を夏季休業とさせていただきます。

2026年8月7日(金)~8月14日(金)

※8月17日(月)より業務再開いたします

休業期間中にいただいたお問合せについては、業務再開後に順次回答させていただきます。皆様には大変ご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解の程よろしくお願い申し上げます。